

新型コロナ禍 揺れる学校教育

株式会社日本総合研究所
調査部上席主任研究員 池本 美香

全国一斉休校から丸2年がたった。いまだ新型コロナウイルス感染症は収束しておらず、マスク着用での入学式も3回目となった。先生も子どもも、お互いマスク越しの顔しか見せず毎日過ごし、「黙食」に「ソーシャルディスタンス」では、新しい友達づくりは難しい。

学級閉鎖によるオンライン授業で、子どもの担任のマスクを取った顔を初めて拝見し、先生の温かさや優しさなど、細かな心情や意図が伝わりにくい状況の長期化が心配になった。その一方で、子どもたちがICT（情報通信技術）を難なく使いこなし、学校の友達のみならず顔も知らない友達ともオンラインで会話やゲームを楽しんでいる姿には少し安心する。

コロナ禍で一気に配備が進んだ1人1台の学習用端末は、学校教育の在り方を大きく揺さぶっている。これまでは学校の先生に知識や情報が集中し、子どもたちはそれを得るために学校に通い、黒板を見てノートを取るのが最も効率的な学習方法だった。しかし、今の子どもはネットを通じて世界中から最新の知識や情報が得られ、ICTの使い方も先生より詳しい。英語学習なら書籍や音声を簡単に入手でき、オンラインで海外の先生と毎日話すこともできる。


そうなる「先生の言うことを聞く」という学校教育の基本的な在り方は、根本的に見直す時期にあるのではないか。

不登校の子どもが増え続けているが、その背景にははじめの問題だけでなく、学校に行く意味が見いだせない子どもの増加もあるように思う。2020年度、懲戒処分などを受けた公立学校の教職員は、体罰によるものが393人、児童生徒に対する性犯罪・性暴力によるものが96人であった。真面目に学校に通い、先生の言うことを聞いて被害に遭う子どももいる。

先日、発達に課題があるとされる就学前の子どもが通うある施設を見学した。そこには、学校のように黒板と机を置いた部屋があった。教室で先生の話落ち着いたように聴けるように練習してほしいという、学校からの期待を踏まえた取り組みだが、そんな練習が必要なのか、深く考えさせられた。

以前、学校の先生が親に対して「先生の言うことがおかしいと家で言わないでほしい」と話すのを聞いて本当に驚いた経験がある。「先生は常に正しく、子どもは未熟で指導が必要」「先生の話をしっかり聞くことこそ子どものため」といった学校観、子ども観は、1人1台端末が導入された今、変わらなければならない。

海外では、新しい学校の在り方が模索されている。ニュージーランドでは、国立の通信制学校があり、完全にオンラインで学んだり、学校にない科目だけオンラインで学んだりすることができる。



障害のある子どもも通常の学校に通うことが原則になっており、個々の子どもに合わせて学習計画を立て、必要な機器や人員を配置する。さらに学校で支援に当たる職員が子どもに敬意を持って接しているか、子どもや親の意見が尊重されているか、国が調査している。すべての子どもが学校に受け入れられ、興味に沿った学びができる「インクルーシブ教育」を目指している。

オランダでは、年齢が異なる子どもたちでグループを編成する「イエナプラン教育」の学校が注目されている。一人一人が自分の関心に基づいて時間割を作り、子どもを信頼、尊重する教師が学びをサポートする。異年齢なので、人より知らなかったり、多く知っていたりするのは当たり前。子どもの中に教え合う関係が生まれ、障害のある子どもも自然に溶け込める。

日本のイエナプランスクール第1号は長野県にある。2019年春に開校した大日向小学校（南佐久郡佐久穂町）は、児童の8割近くが移住者だという。違いを認め合い、互いに協働する学校への期待が高いことがうかがえる。教室はリビングルームのような環境で、学校の食堂は地域に開放され、地域の人が子どもたちの学びに協力している。そうした学校は、子どもや親だけでなく、地域の人にも幸せにする。

コロナ禍前の学校生活に一日も早く戻れるようにと願う人は多いだろう。しかし、1人1台端末が実現した今、先生ではなく子どもが一人一人尊重され、助け合いながら興味関心に沿った学びができる場へと学校は変わらなければいけないと思う。

信濃毎日新聞 2022年4月17日付「多思彩々」に掲載されたものをもとに作成